

# 闘病越え

# 首都駆ける

## 23日 東京マラソン

23日開催の東京マラソンに、重いがんに侵され闘病生活を乗り越えた市民ランナーの男性が出場する。同じ病を克服した海外のアスリートを心の支えに、抗がん剤の激しい副作用やりハビリに耐えた。「今度は自分が誰かの支えになりたい」。自己ベストの更新を目標に、月間350キロを走り込む練習を積み重ね、スタートラインに立つ。

# 「ベスト更新、元気届ける」

外資系証券会社、ゴールドマン・サックス証券



で機関投資家向けの営業を担当していた東京都港区の大久保淳一さん(49)が走り始めたのは1999年。取引先に強く誘われ渋々始めたが、練習するほどタイムが縮まるのが楽しく、のめり込んだ。

しかし2007年3月、練習中の大けがで1カ月入院した際、思いもかけなかった精巣腫瘍(睾丸がん)が見つかった。腹部や肺、首に転移しており、医師は「最終ステージ」と診断。生命も危ぶまれた。

「闘うしかない」。同じ病を克服し活躍する海外アスリートの写真を病室に飾り、自らを奮い立たせた。抗がん剤治療の副作用は激しく、髪は抜

抗がん剤治療中の大久保淳一さん(2007年7月、東京都港区)

け、体中に黒いあざがでる。病院のベッドで体を「く」の字に曲げ、強い吐き気をこらえた。幸い、3カ月弱の抗がん剤投与の効果が上がり、残ったがん細胞を手術で摘出すると壊死(えし)していた。ただ、副作用で肺の細胞壁が硬くなり、呼吸困難に陥ることもある肺線維症に、「水中に顔を沈められる拷問のような状態だった」

2年間の治療で回復し、5キロを歩くのがやっとという状況からリハビリに励み、2011年にはジョギングや筋トレを再開。12年、5年半ぶりに42・195キロのフルマラソンを完走した。「闘病中、同じ病気で亡くなる人を多く見てきた。なぜ自分は生かされたのだろうか」。自問自答の後、勤務先を昨年退職。現在、患者同士で情報交換できる交流サイトを構想中だ。東京マラソン

ンでは病後の自己ベスト4時間12分の更新を狙う。「がんは治らないという誤解を解き、闘っている人たちが少しでも元気づけたい」。さらにその先の目標とする100キロマラソンの自己ベスト12時間6分の更新を見据えて、走り込みを続ける。

第8回東京マラソンは28日に行われ、フルマラソンは午前9時すぎに東京・西新宿の都庁前をスタートし、臨海副都心に至るコースで、約3万5千人が参加。他に10キロレースも行われる。